

柳沢公民館 柳沢1-15-1 ☎042-464-8211 kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp
 田無公民館 南町5-6-11 ☎042-461-1170 tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp
 芝久保公民館 芝久保町5-4-48 ☎042-461-9825 shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp

谷戸公民館 谷戸町1-17-2 ☎042-421-3855 yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp
 ひばりが丘公民館 ひばりが丘2-3-4 ☎042-424-3011 hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp
 保谷駅前公民館 東町3-14-30 ☎042-421-1125 ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

戦争あの日 の記憶

従軍看護婦として久留米陸軍病院等に勤務した、下保谷にお住まいの河口知重さんと、柳沢にお住まいの比留間常吉さんに、戦時中や終戦直後のお話を聞きました。

従軍看護婦 として働いて

河口知重さん(91)



河口さんは看護学校を卒業後、21歳で従軍看護婦となり、多くの兵士や長崎原爆の犠牲となった市民の、死の瞬間に関わりました。

「また若く、人間としても未熟だったから、患者さんの言葉にできない心の叫びを、感じ取ってあげられなかったのが悔やまれます」と言いつつ、河口さんは、今まで誰にも話したことがない当時の記憶を語りました。今回はそのお話の一部をお伝えします。

震えが止まらない

昭和20年7月26日、病状が回復した患者を故郷の新潟に護送した帰り道。私たちの乗る軍用列車が米原駅に入る手前、米軍の艦載機による機銃掃射を受けました。急いで列車から飛び

くつきりと付き、火照ります。前に座った兵隊さんは、次の駅で降りると、自分のタオルをぬらしてきて「冷やしたら？」と渡してくれました。その心遣いがうれしく、こぼれそうになった涙を隠すようにタオルで顔を

長崎の被爆地で

8月20日、原爆救護の任務に就いた私たちは、ホームだけが残った長崎駅に着きました。街は整地されたように何一つなく、人影一つありませんでした。

その街を看護婦20人で隊列を組んで病院まで歩いていると、手に持った布袋をだらりと下げて、ぼとりぼとりと歩いてくる親娘とすれ違いました。抜け落ちた髪の毛が肩や胸のところにぶら下がり、うつろな目は眼球がやや飛び出し、象のようにむくんだ足に、鼻緒が食い込んでいます。まるで幽霊のようなその姿を見て、起きたことの重大さを知った私たちは、無言のまま病院へ向かいました。

国防色の看護服に着替えて病室に入ると、そこは修羅場でした。やけどの処置をする包帯もなく、着物を裂いた布で体を巻いた患者が、毛布を3枚重ねにして敷いた床に寝かされています。

薬はなく、水を飲ませたくとも、その水すら満足にありません。原爆投下から10日は過ぎて



*河口さんが書いた手記(A4ノート10ページ)は、公民館で見ることができます。

「幻の鉄道」が ねらわれた

比留間常吉さん(86)



戦時中、旧保谷町・旧田無町には軍用機のエンジンを製作していた中島飛行機武蔵製作所があったため、何度も空襲を受け、たくさんの犠牲者が出ました。比留間さんがお住まいの柳沢も例外ではありません。

「前日に、疎開していた小金井の親戚の家から柳沢に戻ってきたばかりで、まるで死ぬため

に出た家に戻りましたが、父は3日前に他界していました。戦死した2人の兄の後を追うように亡くなった母の代わりに、物資がない中、私の好物のタコの煮物とタコ酢を用意して、出征を祝ってくれた父はもういない。残された5人の弟妹を前に涙ひとつ出ませんでした。出征の朝、私の顔を見ようとせず、「お前まで行く必要があるのか」とつぶやいた父の言葉が、私が聞いた父の最後の言葉になりました。

「午前2時、空襲警報のサイレンが鳴り響き、照明弾で昼間みたくに明るくなりました。空には落下傘に取り付けられた照明が、いくつもふわりふわりと降りてくるんです。急いで母と弟妹は、家のそばの防空壕に入りしましたが、運悪く、そこにB29から放たれた爆弾が直撃したのです。」

その日の空襲で、母親(43)と妹(3)、弟5人(9・11・13・15・17)が死亡。まだ幼かった妹は母親に抱かれたまま、



*簡易鉄道(幻の鉄道)
この鉄道は終戦後ただちに撤去され、現在ではその痕跡をたどることはできません。終戦後しばらくは、畑に埋まった線路の敷石が邪魔をして、植えた大根が曲がってしまうと、農家の人は困っていたそうです。